

院生ワークショップ

Graduated Student Workshop

越境

2018年7月7日

15:00~18:30

立命館大学

衣笠キャンパス

学而館2F 研究会室(1)

する

《沖縄》

ゲスト

ヴィクトリア・ヤング

Victoria Young (ケンブリッジ大学 常勤講師)

発表

仲井真 建一

Kennichi Nakaima (立教大学 院生)

栗山 雄佑

Yusuke Kuriyama (立命館大学 院生)

コメンテーター

西 成彦 Masahiko Nishi (立命館大学 教授)

司会

中川 成美 Shigemi Nakagawa (立命館大学 特任教授)

主催:立命館大学国際言語文化研究所トラベルライティング研究会

文学

今や「沖縄文学」というジャンルは、沖縄県在住の作家による文学作品、もしくは沖縄県の風景のみを取り扱った作品という領域を指し示すものではない。沖縄文学と名指されたテキストを読むと、そこには沖縄県から移民として世界の各地に散りばめられた者たち、日本の植民地政策の過程、沖縄戦後の米軍占領によって沖縄県に足を踏み入れた者たちの姿がある。移民者が世界各国で体験したことを記したテキスト、もしくは世界各地から沖縄県に足を踏み入れた者との出会いを描き出したテキストを繰れば、沖縄文学が「沖縄のみ」を扱った作品と名指すことはできない。もしくは、大城立裕、又吉栄喜、目取真俊、崎山多美らのテキストは、各国語に翻訳され読まれている。これらのことを踏まえれば、沖縄文学とはテキストを介して様々な者、そして思索が越境していく場であると言えるだろう。

このような沖縄文学の越境性について、シンポジウムでは沖縄文学を牽引する3人の作家、崎山多美、又吉栄喜、目取真俊における越境性に着目する。3者が示したテキストを介して、沖縄文学を様々な問題領域を持つ読者と共有し、読むことについて考えてみたい。

・Victoria Young

「翻訳(不)可能性の越境性:崎山多美『クジャ幻視行』を読む」

本発表では、崎山多美の7つの短編小説が収められた『クジャ幻視行』(2017年)について議論する。「クジャ」という架空の地名には、沖縄市の旧コザ区を「グジャグジャ」にするという意味が込められており、そこは戦争という過去の亡霊と現前する軍事的脅威(米軍基地)をめぐる葛藤に苦しむ空間であり場所である。同作品では、この葛藤を言葉そのものの問題として提起している。この作品の中で用いられる多声的な語りや土地に根差したウチナーグチ(島言葉)は、個々の沖縄の人びとの記憶を脅かしてきた言語的同化政策や歴史修正主義という脅威に対する批判としても成立している。本発表では、この作品をイギリスで読んで英語に翻訳するという試みについて振り返りながら、「記憶」「歴史」「表象」「抵抗」といったテーマが作品の中にどのように反映されているのかという問題について論じてみたい。このようなアプローチを通して、「沖縄文学」の境界内に留まらない『クジャ幻視行』という文学作品の意義と重要性を示したい。

・仲井真建一

「又吉栄喜『巡查の首』論——イメージの抗争」

又吉栄喜『巡查の首』では登場人物の身体を通し、日本、沖縄、アジアの過去・現在が抗争し、多様なイメージが形成されていく。それはアイデンティティ画定に不可欠なものとして提示されるが、噂、嘘、記憶違い、夢によって幾度も塗り替えられ、時に矛盾したままに放置される。そして「似ている」というあやふやな語で連関させられていくのだが、このようなテキストの分析を通し「沖縄／日本／世界文学」の枠組みを考察する。

栗山雄佑

「感知される他者／性暴力——目取真俊作品における性暴力をめぐる」

目取真俊は、沖縄戦時から現代に至るまで沖縄内に渦巻く性暴力を描き続けている。その中で、沖縄に連行された朝鮮人従軍慰安婦と沖縄の従軍慰安婦との出会いを描く「群蝶の木」、もしくは『眼の奥の森』に描かれた沖縄に侵攻した米軍兵士の性暴力の場面に注目する。2つの作品が描き出した、重層的に折り重なる性の加害／被害に対する、言語で表出できない他者の理解し得ない傷の理解、そして自身の内奥にある加害性の描出から、目取真が企図した沖縄内における性暴力をめぐる感情を他者に伝達するための試みを考えたい。